

スターウォーズ エピソード3 シスの復讐

2005(平成17)年6月20日鑑賞(試写会・大阪厚生年金会館大ホール)

★★★★



監督・脚本・製作総指揮＝ジョージ・ルーカス／製作＝リック・マッカラム／撮影監督＝デイビッド・タッターソル／出演＝ユアン・マクレガー／ナタリー・ポートマン／ハイデン・クリステンセン／イアン・マクダーミド／サミュエル・L. ジャクソン／クリストファー・リー／フランク・オズ(声の出演)／ジミー・スミッツ／アンソニー・ダニエルズ／ケニー・ベイカー (20世紀フォックス映画配給／2005年アメリカ映画／141分)

……大阪初の試写会の会場は満席。何と1番手は朝9時半から並んでいたとのこと。そして久しぶりに、映画のはじまりと終わりに盛大な拍手が鳴り響くという体験も。スターウォーズの物語は複雑で登場人物も多彩だが、『スターウォーズ エピソード3』はその最終章。それまでの作品における数々の謎が明らかにされるとともに、ハイライトではアッと驚く主役たちの対決が……？ 目を見張る映像効果や、あのライトセーバーによるチャンバラ劇(?)も悪くはなく十分に楽しめるものだが、そんなに大騒ぎするほどのもの……？

大阪初の試写会は満席！

7月9日から全国公開されるこの『スターウォーズ エピソード3 シスの復讐』の大阪初の試写会が6月20日夕方、厚生年金会館で開かれた。『スターウォーズ』の今までの蓄積(?)と既に公開されたアメリカでの大人気もあって、その前評判は上々。この試写会には何と朝9時半から並ぶ人がでたとのこと。

今回の試写会の観客は当然のことながら圧倒的に若者が多い。会場が暗くなり、スクリーンに『スターウォーズ エピソード3』という表示が出るや否や、会場からはウォーという歓声とともに拍手が……。申し合わせていたわけではないのだろう、これが今時の若者流……？

また、普通は映画が終わり字幕が流れ始めるとボチボチと席を立ち始め、字幕

が流れ終わる頃には半分位の観客がいなくなっているのだが、今回だけは特別で席を立つ人はほとんどいない。そして字幕が消えるや否やスタート時を上回る大拍手が……。もっとも、どうせやるのなら、みんな立ち上がってもっと盛大にやればいいのと思ってしまったが……。

詳細は巷の「スターウォーズ博士」のあの若者に……？

ジョージ・ルーカス監督の『スターウォーズ』は、1977年の『スターウォーズ 新たなる希望』が最初。そしてこれは、『スターウォーズ 帝国の逆襲』（80年）、『スターウォーズ ジェダイの帰還』（83年）のクラシック3部作で「完結」した。

ところが『スターウォーズ』は、その後さらに『スターウォーズ エピソード1』（99年）、『スターウォーズ エピソード2』（02年）と続き、今回の『スターウォーズ エピソード3』（05年）がその完結編となっている。

このように『スターウォーズ』は過去28年間に合計6作が作られ、いずれも大ヒットという偉業をなし遂げているわけだ。

昔の映画の話など全く通用しない今時の若者たちも、そのほとんどがこの『スターウォーズ』のファン。また、普段あまり映画を観ないといっている若者でも、「どんな映画を知っている？」と聞くと大体が『スターウォーズ』と答える。それほどこの『スターウォーズ』は若者に支持されているわけだ。

この『スターウォーズ』の物語は壮大で、人間関係も複雑。そこで全6作それぞれの特徴は……？ そんなことを知りたければ、それは「スターウォーズ博士」のあの若者に聞けばいい……。

そんな若者がゴロゴロいるから世の中面白い……？

美しい映像と迫力ある戦争シーンだが……？

『スターウォーズ』が大人気となったのは、物語の壮大さや登場人物、ロボットその他のキャラクターの多彩さもさることながら、やはりその視覚効果によるものが大きいはず。CG技術をふんだんに使ってこれまでにない壮大で美しい映像をスクリーン上に表現したのは、まさに革命的といえるもの。そしてもう1つは戦争シーンの迫力とスピード感。何よりもこの戦争シーンの迫力とスピード感

が若者の大きな支持を受けたことはまちがいない。しかしそれは同時に大きな問題点も……？

それは、私ですらこんな映画を観ていると、「戦争はゲームだ」と錯覚しそうになること。さまざまな戦場(?)において、さまざまなキャラの兵隊(?)が現れて、さまざまな「戦争」が展開されるが、すさまじい音響効果の中で、次々と敵兵(?)が倒れていくのをスクリーン上で観ていれば、そりゃもう快感!となるのもわかろうというもの。こんな体験を家庭の中で、また机の前で身近に体験できるのがコンピューターゲーム。パソコン画面上でこんな戦争ごっこを毎日やっていれば、何が現実の話で、何がコンピューター画面上の架空の話なのかわからなくなってきても当然……。するとその結果は……？

『エピソード3』のテーマは？

『スターウォーズ』の主役の1人はまちがいに、若きジェダイの騎士アナキン・スカイウォーカー(ヘイデン・クリステンセン)であったはず。この『エピソード3』でも、最初は、彼がもう1人の主役であるオビ=ワン・ケノービ(ユアン・マクレガー)とともに共和国元老院の最高議長パルパティーン(イアン・マクダーミド)を救助するための戦いのシーンから。この戦いにはR2-D2(ケニー・ベイカー)も参加して大活躍……。しかし、その後少しずつこのパルパティーンとジェダイ評議会のマスターたちとの間の溝が大きくなっていくことに……。

ジェダイ評議会のメンバーたちは、オビ=ワン・ケノービの他、評議会の重鎮メイス・ウインドゥ(サミュエル・L. ジャクソン)や最古参メンバーで賢者のヨーダ(フランク・オズの声)たち。この両者の溝は果たしてどこから生まれたのか?そして、オビ=ワン・ケノービを師と仰ぐアナキンはこの両者の板挟みとなる中、どのように行動していくのか?それがこの『エピソード3』のテーマだ。

「選ばれし者」アナキンの落とし穴と究極の選択は……？

アナキンは思慮分別に優れかつ勇敢なジェダイの騎士だが、このような若者に

よくありがちなのが「自信過剰」という落とし穴。「何をそんなに急ぐのか？」というのが既得権益を持っている(?)権力者たち(=評議会のマスターたち)の意見だが、本人にしてみれば、「これだけの功績をあげた俺をなぜ司令官にしないのか……」等々の不平不満が生まれるのは、世の中によくあること……? そうすると、この若者の持つエネルギーと不平不満をうまく活用しようとするのは、大体、敵方となる……。こんな物語は、『三国志』の中にはてんこ盛り……。

もう1つ面白いのは、未来〇千年という宇宙の社会であっても、所詮男と女の愛情は同じだということ。だとすると、男女の愛を優先させるのか、それとも社会的役割(義務)の履行を優先させるのかという究極の選択を迫られるケースも、リーダーとなっている男には時々ある話。

日経新聞のラストのページにある「私の履歴書」は私が毎日楽しみに読んでいた欄だが、今連載されているのは、元阪神タイガースの監督だった野村克也氏が書いているもの。ちょうど6月20日、21日の記事は、前の奥さんとの離婚問題を抱えながら、あの有名な沙知代夫人とつきあい始めた頃の話。

それによると、彼の後援者だった葉上照澄師(比叡山延暦寺大僧正)から「野球を取るか、女を取るか、ここで決断せえ」と迫られ、彼は「女を取ります」と答えたとのこと。これはきわめて人間的な決断(?)だが、そういう選択をするとその後苦難の道が待っていることは、野村監督もこのジェダイの騎士アナキンも同じ……?

複雑な勢力図と人間関係は立派な教材

『スターウォーズ』は銀河系宇宙が舞台。そこには共和国軍や反乱軍、さらに分離主義勢力がいる。そして主役はジェダイ騎士団の面々だが、その対抗勢力としてシスがいる。さらに面白いのは、R2-D2そしてC-3POという『スターウォーズ』おなじみの2つ(2人?)のロボットがおり、その他にも『スターウォーズ』オリジナルのさまざまなキャラクターがいること。

全6作にわたって、主役の共和国軍とジェダイ騎士団を中心として壮大な物語が展開されてきたわけだが、これらは、真剣に考えれば立派な教材! 中国の

『三国志』が面白いのは、魏・呉・蜀という三国に取れんされていく過程での複雑な勢力図の動きと三国鼎立状態をやっと完成させた後、その状態を維持するべく苦勞する蜀の宰相、諸葛孔明の人間的魅力などによるものだが、それと全く同じような要素がこの『スターウォーズ』にもあるわけだ。したがって若者たちも、『三国志』は読まなくとも、この『スターウォーズ』を教材として、外交を中心とする国と国との複雑な権謀術策や権力者たちの権力闘争を学び、その中から、「人間観察眼」を養ってもらいたいものだ。

ライトセーバーによるチャンバラは面白い……？

『スターウォーズ』の1つの「売り」が、ジェダイ騎士団が使うライトセーバーという光り輝く刀による闘い。飛び道具（？）は他に多種多様なものがたくさんあるのだが、その飛び道具での一発勝負では全然面白くない……。

西部劇では、拳銃による一発勝負になる前の前提となるストーリーが面白いわけで、それがあからこそハイライトの一発勝負が生きるわけだ。したがっていくら飛び道具が発達しても、所詮個人戦（決闘）においてはやはり武器は刀（剣）がベスト……？

そこで考え出されたのがこのライトセーバー。これは振り回すときにキラキラと輝くから観ているときれいで、チャンバラの迫力が増すというメリットはあるものの、何回も観ていると飽きてくる……？ やっぱチャンバラは日本刀による真剣勝負が1番面白い……？

紅一点はナタリー・ポートマン

映画を観る楽しみの1つは、この『スターウォーズ』のような映画であっても、やはり女優の美しさ。この『エピソード3』における紅一点は、あの、4人の男女のややこしい恋愛ゲームを描いた（？）『クローサー』（04年）で、美しくも悩ましい肢体を見せ、アカデミー賞助演女優賞にノミネートされたナタリー・ポートマン。

『クローサー』ではさんざん男を惑わす役柄を実に魅力的に演じていたが、男社会を中心に描いた（？）この『エピソード3』では女は所詮待つ身だけ。もっ

とも彼女が扮するパドメ・アミダラは、ジェダイの騎士のアナキンと秘密の結婚をしながらも、その身分は元老院議員という立派なもの。したがって彼女も妊娠したとはいえ、元老院議員としてアナキンとともに何らかの政治的活動をしようとすればできるはずだが、この映画ではそれはなし。パドメはあくまでアナキンの愛の対象としての存在であり、アナキンの行動によって左右される待つ身だけの女という役割になっているのは少し残念……。

もっとも、女は子供を産むことによって、次世代になお活躍できる人材を残すのだからすごい……。

『エピソード3』か『宇宙戦争』か、それとも……？

この『エピソード3』はアメリカでは5月19日の公開初日だけで5000万ドルを稼ぎ出すという（従来の最高は『マトリックス リローデッド』（03年）の4250万ドル）何ともすごい新記録を樹立したことが『キネマ旬報』7月上旬号・157頁で報告されている。さて7月9日から公開される日本では……？

この『エピソード3』に「対抗」するのは、6月29日から公開されるスティーブン・スピルバーグ監督、トム・クルーズ主演の『宇宙戦争』。ハリウッドの黄金コンビの作品だけにその興行に対する期待は大きく、配給のUIPも「最低でも興収100億円」を目標として掲げているとのこと（『キネマ旬報』7月上旬号・140頁）。

果たして今年の夏、日本はこの2つの映画に席卷されるのだろうか……？ 大ヒットを邪魔しようとは思わないが、私は日本の若者たちには、日本の夏の映画はこの2本だけではないことをよく考えて、観る映画を選択してほしいと思っているのだが……？

2005(平成17)年6月21日記